

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463445

研究課題名(和文)排泄障害のアセスメントとケアプロトコルの開発

研究課題名(英文)Assessment of excretory disorders and development of care protocol

研究代表者

上山 真美(manami, kamiyama)

群馬大学・大学院保健学研究科・講師

研究者番号：90451723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、排尿のみならず排便を含めた排泄障害のアセスメントとケアプロトコルの開発とした。排便に関する実態調査では、介護老人保健施設入居者の約6割が塩類下剤、約2割が大腸刺激性下剤を使用し、下剤以外のケア実施は少数であった。排尿障害を判断するためのフローチャートの有用性の調査では、看護師、看護学生共にチャートを使用した方が使用しない時に比べて得点が高かった(P=0.000)。また、排尿障害、排便障害のある高齢者に対し、それぞれレクリエーションによる効果を検証した結果、頻尿の改善や排便量の増加等が見られた。文献研究、上記研究結果および専門職が試案を施行し得られた意見等を反映させ完成版とした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an assessment and care protocol for excretory disorders including urination as well as defecation. In the field survey on defecation, about 60% of residents of nursing home health care facilities used salt laxative, about 20% used large intestine irritant laxative, and few care except laxatives performed. In the survey of the usefulness of the flow chart for judging urination disorder, scores were higher than those when nurses and nursing students used charts (P = 0.000). In addition, as a result of examining the effect by recreation for elderly people with urination disorder and defecation disorder, improvement of frequent urination and increase in defecation volume were observed, for example. Reflected literature research, the results of the above research and the opinion that professionals took in the draft were reflected and made a complete version.

研究分野：高齢者看護

キーワード：排泄ケア 排尿ケア 排便ケア

1. 研究開始当初の背景

わが国では、他国に例を見ない超高齢社会を向かえている。在宅要介護高齢者を対象とした排尿に関する研究では、約7割が問題を持ち、約4割に尿失禁がみられた。その他の施設等で行われた研究調査も含めて推測すると、60歳以上の高齢者400万人に尿失禁があり、200万人がオムツを使用していることとなる。一方、排便に関する調査では、施設入所高齢者の約7割が下剤を服用し、排便の問題として便失禁、便秘、下痢、頻便などが繰り返し生じていた。排泄は、本人にとっては羞恥心を伴い、介護者にとっては負担感が多い行為であり、高齢者の退院先を決める一要因となるため、適切なケアを実践することは重要であるといえる。

本邦における高齢者の排泄管理に関する文献では、「高齢者排尿管理マニュアル」「高齢者排尿障害マニュアル」「EBMに基づいた高齢者尿失禁ガイドライン」「尿失禁診療ガイドライン」「過活動膀胱診療ガイドライン」「高齢者の生活機能再獲得のためのケアプロトコル」等がある。これらは、尿失禁をきたす疾患や手術・治療について主に記しており、排尿障害の評価・管理については流れが記述されているのみである。しかし、直接看護に必要な具体的アセスメントやケア方法についての記載は少なく、看護の現場へは定着していない。

筆者らは、2007年度に「安全かつ効果的な膀胱留置カテーテル抜去に向けたプロトコル」を作成し、2008年度には、このプロトコルを施行した。その問題点に対し、2010年度から2012年度に「膀胱留置カテーテル抜去後排尿障害のアセスメント・ケアガイド」を作成し介入した。その結果、約8割がカテーテルから離脱できた。一方、介入から見てきた問題は、頻尿や尿失禁などカテーテル以外の排泄障害に対して、対処を行うのみで原因の明確化とそれに対するケアが実施されていないことであった。そのため、これらの課題に取り組む必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、筆者が開発した膀胱留置カテーテル抜去後のケアガイドを発展させ、排尿のみならず排便を含めた排泄障害のアセスメントに焦点をあてて、臨床現場への定着に向け、看護師レベルで活用できる、排泄障害のアセスメントとケアプロトコルを作成しその有用性を検証することである。

3. 研究の方法

(1) 排泄に関する実態調査

対象は、A介護老人保健施設に入所中で同意の得られた人とした。調査内容は、基本情報(性別、年齢、疾患名、服用薬、ADL自立度、認知度、食事の種類、食事量、水分摂取量)、排便状況(1日の排便回数、便の性状・量、排泄方法)、排便ケアの内容(洗

腸、摘便、坐薬、その他の有無)、下剤の使用状況(使用している下剤の種類・量)、排尿状況(1日の自尿及び尿失禁回数)等とした。調査は基本的に、診療録及び看護記録より、全員同一時期の7日間について行った。ADLや認知度については、研究者が看護師や介護職、理学療法士と連携して評価した。

(2) 排尿障害を判断するためのフローチャートの有用性の調査

対象は、看護学生、看護職とし、筆者が開発した、排尿日誌から主な排尿障害の種類を判断するためのフローチャートの有用性を検証した。

看護学生を対象とした調査

調査はA大学の看護学専攻4年生のうち、同意の得られた人に実施した。主な調査内容は、対象者の概要とフローチャート使用前後の排尿日誌10事例に対する主な排尿障害の種類判断及びフローチャートの使い勝手とした。対象の概要は、年齢、性別、排尿日誌をつけた経験の有無、排尿日誌をアセスメントしケアに活かした経験の有無、超音波測定器を用いた残尿測定経験の有無、残尿測定の結果をアセスメントしケアに活かした経験の有無の6項目とした。事例に対する主な排尿障害の種類判断では、10事例の排尿日誌を配布し、排尿障害の種類(腹圧性尿失禁、機能的尿失禁、頻尿・過活動膀胱(切迫性尿失禁)、尿排出障害(溢流性尿失禁)、問題なし(正常))について回答を求めた。フローチャートの使い方については、使用前の回答終了後に約5分で研究者が説明した。

看護職を対象とした調査

調査は、B県内の3病院と1訪問看護ステーション看護師のうち同意が得られた人に実施した。主な調査内容は、対象者の概要とフローチャート使用前後の排尿日誌10事例に対する主な排尿障害の種類判断及びフローチャートの使い勝手とした。対象の概要は、年齢、性別、看護師経験年数、排尿日誌をつけた経験の有無、排尿日誌をアセスメントしケアに活かした経験の有無、超音波測定器を用いた残尿測定経験の有無、残尿測定の結果をアセスメントしケアに活かした経験の有無等とした。事例に対する主な排尿障害の種類判断では、10事例の排尿日誌を配布し、排尿障害の種類(腹圧性尿失禁、機能的尿失禁、頻尿・過活動膀胱(切迫性尿失禁)、尿排出障害(溢流性尿失禁)、問題なし(正常))について回答を求めた。フローチャートの使い方については、使用前の回答終了後に約5分で研究者が説明した。

本研究は所属大学の倫理審査委員会の承認とC病院の倫理審査の承認を得て行った。

(3) 排尿障害に対するレクリエーションに関する介入

対象はD介護老人保健施設に入所中で、頻尿等の症状がみられる、医師の許可が

ある， 同意を得られた人とし，看護師長に紹介してもらった。レクリエーションは，風船バレー，散歩，ドールセラピー，歌などを約 30 分から 1 時間 学生及び他の利用者とともに実施した。直接的評価は，排泄状態，フェイススケール，対象者の言動，副次的評価は，認知症状(MOSES)，日常生活動作(FIM) 生活に対する意欲(VI)等とした。D 病院の倫理審査委員会より承認を得て行った。

(4) 排便障害に対するレクリエーションに関する介入

対象は，対象は介護老人保健施設に入所している高齢者のうち①3 日以上排便が無い，または緩下剤を使用している， 障害老人の日常生活自立度判定でランク A 以上，レクリエーション内容の説明を理解できる， 医師の同意が得られた者とし，施設の看護師長に紹介してもらった。便秘解消レクリエーション(以下，便秘レク)は週 3 回(月・水・金)を 4 週間，午前と午後に各 1 回，通常行われているレクリエーション(以下，通常レク)とは別に約 15 分ずつ実施した。介入の流れは， バイタルサイン測定と準備， 便秘レク， クールダウンとバイタルサイン測定とした。なお，便秘レクの内容については理学療法士に相談をし，個人のレベルに合うよう調整してから行った。便秘レク A は，2 曲の音楽に合わせて歌を歌いながら，排便に効果のあるオリジナル体操を考案し，楽しく体を動かせるようにした。便秘レク P は，輸送ゲームとストロー飛ばしゲームとした。評価項目は排便に対する効果と副次的効果とした。E 病院の倫理審査委員会の承認を受けて行った。

5) 専門職による試案の施行

泌尿器科医師や老人看護専門看護師など，臨床現場で働く専門職を対象として，修正をした排尿や排便の初期アセスメント用紙等，排泄障害のアセスメントとケアプロトコル試案を施行してもらった。

4. 研究成果

(1) 排泄に関する実態調査

対象は 62 名，性別は男性 17 名(27.4%)，女性 45 名(72.6%)，年代別では，70 代 9 名(14.5%)，80 代以降 49 名(79.0%)であった。排便が 7 日間のうち 3 日以上みられた人は 55 名(88.7%)，定時下剤服用者 43 名(69.4%)，そのうち塩類下剤服用者 38 名(61.3%)，大腸刺激性下剤服用者 11 名(17.7%)，2 剤併用者 6 名(9.7%)，副作用に便秘がある薬剤を服用していた人は 46 名(74.2%)であった。

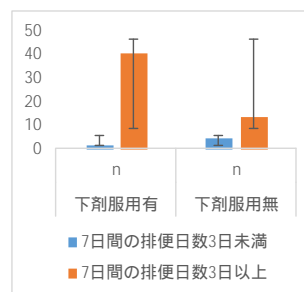


図1 下剤の服用と排便日数

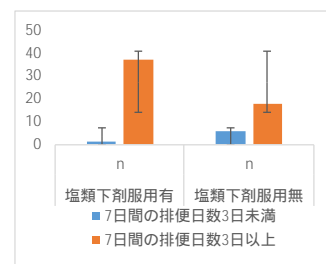


図2 塩類下剤の内服と排便日

排便が 7 日間のうち 3 日以上みられた人と，下剤服用の有無 ($p=0.02$)，塩類下剤服用の有無 ($p=0.01$)，精神疾患の有無 ($p=0.04$) と有意な関連がみられた。一方，大腸刺激性下剤服用の有無 ($p=0.60$)，2 剤併用 ($p=1.00$)，性別や年代などの背景条件では，有意な関連はみられなかった。華麗のほか内服治療の副作用による便秘を考慮し，下剤使用の適切性についてアセスメントできるようにする必要も示唆された。

(2) 排尿障害を判断するためのフローチャートの有用性の調査

看護学生に対する調査

対象は，調査に協力の得られた 4 年生 29 名のうち有効回答であった 25 名とした。ほとんどの人は，排尿日誌をつけた経験，残尿測定をした経験があり，約半数が排尿日誌をアセスメントシケアに活かした経験，残尿測定をアセスメントシケアに活かした経験がみられた。

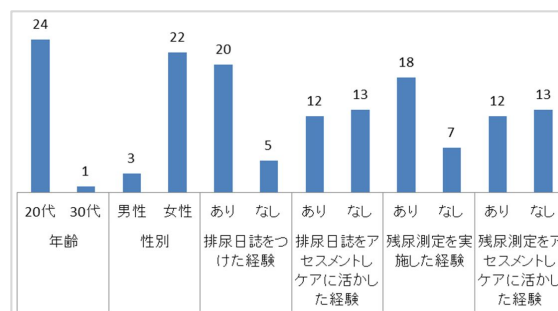


図3 対象の概要

フローチャート使用前後の平均得点を比較すると，使用前 76.8 点に比べ使用後 98.8 点の方が高く有意な差が見られた ($P=0.000$)。

看護師に対する調査

対象は 135 名で，年代は 20 代 32 名，30 代 44 名，40 代 42 名，50 代以上 17 名，看護師経験年数は平均 12.7 ± 8.8 年であった。フローチャート使用前後の平均得点を見ると，使用前 61.6 点に比べ使用後 91.8 点の方が高く有意な差が見られた ($P=0.000$)。対象の背景とチャート使用前の得点が 80 点以上について有意な関連は見られなかった。看護師に対するフローチャート使用の有用性が示唆された。

(3) 排尿障害に対するレクリエーションに関する介入

対象は80から90代の女性4名であった。アルツハイマー型認知症などがあり、認知自立度判定基準はaであった。対象者はレクリエーションの介入前後で、1日の排尿回数の減少、特に夜間の排尿回数や尿失禁の回数が減少した。また、自発的な発言や他者へ自ら話しかけるようになり、風船バレー実施中に他者を気遣う様子がみられた。更に他者と一緒に歌うことや歌う曲のレパートリーが増えた。フェイススケールの得点は2点から0点に改善した。MOSESは、「イライラ感・怒り」、「抑うつ」などの項目が改善した。排尿ケアとしてレクリエーションを実施する効果が示唆された。

(4) 排便障害に対するレクリエーションに関する介入

対象は男性1名女性4名で、70~90代であった。ほとんどの人が緩下剤や整腸剤を使用していた。FIMの平均点は、95点(84点-110点)であり、車椅子移動が3名、シルバーカーを使用が2名であった。便秘レクの実施回数は午前、午後共に12回で、平均実施時間は、前かが13.3±3.2分、後かが17.7±8.7分であった。

介入前に比べて、実施中の方が、1週間ごとの排便の総量が増加、フェイススケールの得点も改善した。排便に対する薬物以外のケアとして、レクリエーションによるケアの効果が示唆された。高齢者は、緩下剤を服用し便秘のコントロールをしている人が多く、中には、便秘と下痢を繰り返す人も見られる。適切に緩下剤を使用することは勿論、便秘に対するケア方法を確立することも重要であるといえる。

(5) 専門職による試案の施行の結果

対象は泌尿器科医師と老人看護専門看護師を含む看護師とした。その結果、色で分けるとわかりやすい、評価表としてはA4 1枚が妥当、パウチされたものがあると使いやすい、冊子は内容の確認には有効、等の意見が聴かれ、一定の効果が示唆された。一方で、薬の種類や内容および作用とそれを調べるために時間を要する、項目にわかりにくいところがある、等の課題も明らかになった。これらの結果を加味して、排泄障害のアセスメントとケアプロトコルを完成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 6 件)

若杉美樹, 介護老人保健施設に入所している高齢者の便秘に対するレクリエーションの効果, NPO 法人日本リハビリテーション看護学会, 2017 年

上山真美, 排尿日誌から主な排尿障害の種類を判断するためのフローチャートの作成とその有用性, NPO 法人日本リハビリテーション看護学会, 2016 年

佐山裕華, 介護老人保健施設の専門棟に入所しており排尿障害のある高齢者に対するドールセラピーの効果, 日本老年泌尿器科学会, 2016 年

矢嶋美咲, 看護学生が排尿日誌から主な排尿障害の種類を判断するためのフローチャートの有用性, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会, 2015 年

上山真美, 介護老人保健施設における排便状況と排便ケアの実態, 日本老年泌尿器科学会, 2015 年

日野原敬子, 蓄尿障害のある認知症高齢者に対するレクリエーションの効果, 日本創傷・オストミー・失禁管理学会, 2015 年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上山 真美 (KAMIYAMA, Manami)
群馬大学・大学院保健学研究科・講師
研究者番号: 90451723

(2)研究分担者

内田 陽子 (UCHIDA, Yoko)

群馬大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号： 30375539

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()